第87・88号
昭和58年11月25日

内容

ギリシャにおける学問の精神…1～3
第4回大学院共同セミナー……2～5
法人ニュース……5
千人会，寄付金報告……6
事業部だより……7～12
米国20大学から二つの日本研究セミナーを迎える……8～9
海外日本語講師研修会……9
利用状況……10～12
わたしたちの合宿……11

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発行
財団法人 大学セミナー・ハウス
＜所在地＞
東京都八王子市下柚木(〒192-03)
電話　0426-76-8511～3
振替口座　東京 5-74590番

編集
大学セミナー・ハウス
企画室
編集人　中川秀恭
発行人　吉川孔敏
製作　中央公論事業出版

第4回大学院共同セミナー講義から

ギリシャにおける学問の精神

山梨医科大学教授
川田殖

＜一＞

どんな学問においても一見初歩的に見える問題が、実は基礎的な難しい問題につながります。たとえば、初歩的な計算をすることは誰にもできますが、「数とは何か」と聞かれると、それは大数学者にとっても難しい問題です。「生きている」ということは子供でも知っている事実ですが、「生命とは何か」という問題になると、それをずばり答えられる人はなかなかいません。私はここのつながりに学問における最も根本的な問題が潜んでいるのではないかと思っています。

いま「生きている」と言いましたが、私たちは生きている中で、いろいろなものに出会い、また喜怒哀楽を味わいます。そこからギリシャ人がエンペイリア（経験）と名付けたものが出てくるのですが、それは目に見えるもの見えないものを問わず、私たちに迫って、私たちを取り囲み、刺激を与えるものに対する私たちの反応のことです。それははじめは外的な、感覚的な単なる印象のようなものにすぎないかもしれません。しかし、環境や感覚に頼っているだけでは、とんだ間違いが起こることがあります。そこでギリシャ人は、その中から動くことのない、変わることのないものをどうしたら見分けることができるかと考えたのです。これこそが学問の誕生の場ともいうべき、ギリシャの哲学における認識というものの始まりだったのです。

それは現実の生活の中での切実な問いかけでした。学問はこのような日常生活の中で、いかに現実に誤りなく対処し、ちゃんと生きていくかという問題に対する一つの独特なアプローチだと言えるでしょう。「知への愛」という原意をもつ哲学もまた、人間が生きていく上での深い欲求であり、それは人間の生命の一つの大切な真実の姿なのです。

＜二＞

哲学史の始めに出てくる、タレスを祖とするミレトス学派の人びとが万物の根源を探求した学問的意味は、どこにあったのでしょうか。それは、彼らが先人の言葉よりも、むしろ先人の示した探求の努力とその精神とを継ぐべきだと考えた点にあります。どんなに真実らしく見えても、偶さかなものに腰をおろすのではなく、自分の目で見、自分の頭で考え、本当にそうだとわかるまであらゆる面から徹底的に追求する。こうして、確かな知が善く生きていこうという意欲に結びつき、これを正しく導くものとなる。これがソピアー、つまり本当の意味での知恵だったのです。

このことは「三平方の定理」を発見したピュタゴラス教団の人びとについても同様です。元来、彼らは単なる儀式や教義によっては究めることのできないような人間の魂の問題と取り組み、どうしたら自分の魂を浄められるかを、理論的探究の典型である数学を通して求めた人びとでした。私たちはここに、物事の最も根本的なところから一歩一歩着実に考え続けてゆく、ギリシャの合理的思考の一つの典型的な姿を見出すことができます。

またパルメニデスを代表者とするエレア派の人びとも、絶対不動の確実な論理的前提に運命を賭けて出発しようとした人びとでした。彼らは、近世のはじめいろいろな思想の過巻く中で、自分にとって絶対確実なものを出発点にしようと決心したデカルトの先達と言えるかもしれません。あらゆるものを疑う中で、彼らは自分が本当に信頼できるものだけに従って生きていこうという哲学的精神の上に、論理というものを探求し、築き上げていきました。

＜三＞

しかし哲学も歴史に生きる人間の営みですから、真っ直ぐに成長していくとは限りません。一つの曲り角は、ペルシャ戦争の勝利によって、一躍当時のギリシャ世界の列強として進出したアテネに起こりました。後進国における文明開化の常として、ここでも知識が知識それ自体の重さによって受け入れられたのではなく、自分たちのいわば近視眼的な必要のために使われる風潮が多く見られました。論理的追求を徹底していった結果、納得して得られた知識ではなく、要領よくまとめられた出来合いの知識が普及し、それを使って社会の現実の要請に上手に答える機能的な人間が次々と大量生産されていきました。こうして学問の名に隠れて、自分たちの手近な欲望を満足させ、他の事には無関心という恐るべき無責任な人びとも出てきました。こういう人たちが大衆を煽動し、亡国とその後の精神的混迷という思いもよらない所へ彼らを引っ張っていったのです。

そういう中で疑い得ないダイモーンのしるしに耳を傾けつつ思考を続けた結果、真の人間の確立をぬきにしては国が建たないことに着目し、人間を真実なものにする基盤を求めて、人びとに「とは何か」という根本的な問を投げかけたのが、ソクラテスです。彼は単なる自己目的のための合理性や学問を求めた人ではなく、転落していく祖国の現実の中で、一人びとりの魂に問いかけつつ、人間の生き方の根本をつきつめながら共に真実を求めていったのです。

ソクラテスが用いたこのような方法が対話法と呼ばれることはご承知の通りです。それは偽りの安心にまどろむ魂を目覚めさせつつ、共なる労苦によって、真実に生きる人間の誕生の喜びを体当たりで示し、人を本当の善き生へと導くわざでした。ここに、ソクラ

（2ページ4段目へつづく）

第4回大学院共同セミナー

主題＝ヘブライズムとヘレニズム
――合理性と非合理性の問題をめぐって――

期日――昭和58年7月1日～3日

中川秀恭

〈講義・演習指導〉

Ⅰ イスラエルにおける神・人間・社会
国際基督教大学教授　並木浩一

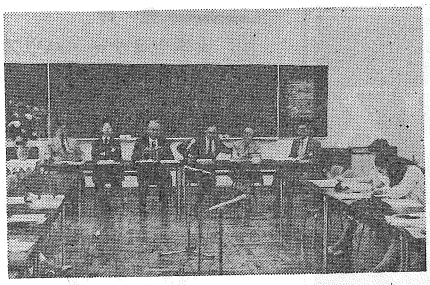
Ⅱ ギリシャ文学における人間と人間を超えるもの―ダイモーンの顕現をめぐって―
国際基督教大学教授　川島重成

Ⅲ ギリシャにおける数学的思考
国際基督教大学教授　絹川正吉

Ⅳ ギリシャ哲学における合理性と実証性
山梨医科大学教授　川田　殖

Ⅴ 初期キリスト教における「正統」と「異端」
東京大学教授　荒井　献

〈運営委員〉
大学セミナー・ハウス館長
国際基督教大学教授　阿久津喜弘



全体集会：左から川島，絹川，中川，川田，荒井，並木の諸氏（大学院セミナー館）

〈参加学生〉37名（内女子16名）
ICU(10)、東大(3)、東女大、立教大、早大(各2)、筑波大、千葉大、京大、学習院大、慶大、成蹊大、中大、法大、明大、立正大、上智大、津田塾大、一橋大、東京理科大(各1)、その他(4)
計19校

◇　◇

西洋文明は、これまでわれわれ日本人にとって、しばしば近代合理主義文明の代名詞にすぎなかった。そして、今日、それはとめどなく進行する科学技術文明として、われわれに様々な問題を投げかけている。「西洋に独特な合理主義とは一体何か。また、それへの有効な批判とはどのようなものか」こうした問題意識のもと、今回の大学院共同セミナーは、その合理主義を生み出し、育んできた西洋的知の本質を問うセミナーとして企画された。ヘブライズムとヘレニズムという古代の二大思潮にまで遡って、特に合理と非合理の問題に焦点をあてつつ、西洋的知の諸相を解明しようというのである。

◇　◇

この企画は、当初〝ギリシャ文明〟に関するものとして共同セミナー委員会に出されていたが、当ハウスの中川館長と阿久津委員の〝ICUコンビ〟に立案が委ねられることになり、最終的には、西洋文明への視野の拡大をめざして、もう一つの淵源であるヘブライズムを加えて、実現される運びとなった。いろいろな意味で「ヘブライズムとヘレニズム」は、われわれ日本人には馴染みの薄いテーマであったため、当初どれだけの参加者があるか心配されたが、応募者は50名ほどを数え、大学院共同セミナーの適正規模を考えて、一〇名近くの人を断わらなければならないという状況であった。また、応募者の半分近くは、西洋古典学を含めて哲学や宗教学などの専門分野の者で占められ、大学院共同セミナーにふさわしい充実した演習が展開した。

◇　◇

今回は、セクション別の演習を設けず、全員が参加することのできる講義と演習を取り入れた。各専門領域の交叉を通じて、学際的な視野から、テーマの全体像をより明確に浮かび上がらせようという配慮からである。

プログラムは、中川館長の歓迎の挨拶に続き、セミナー初日の張り詰めた緊張感の中、五人の指導教授による集中的な講義によって開始された。以下は、その講義の要旨である。

◇並木浩一氏――

預言者は退廃したイスラエルの現実批判を出発点として、神による審判の告知を行なった。アモスに見られるように、自らの非合理的な体験をロゴス化（言語化）したところに彼らの特徴がある。

（前ページからつづく）

テスによるロゴスの探求の本当の意味があったのです。

しかもこの共同探求の結果到達した結論は、すべて一里塚にすぎないということを、彼はよく自覚していました。そしてこうした仮設意識を常に持ちながら人間をつき動かす意欲の力（エロース）を正しく導いていくことを、パイデイアー（教育）と呼びました。このような教育によってはじめて、人間が本来持っている能力を十分に発揮し、「魂の立派さ」がもたらす善きものを生み出すことが可能になるのです。

〈四〉

プラトンは若き日にこのようなソクラテスと出会いました。彼はソクラテスが命を賭けて問い、運命を賭けて生きた道に続くことにしたのです。彼もまた、真実なるものなくして、いかなる善き社会も生活もあり得ないということを確信していました。彼はやがてアカデメイアという学園をつくり、若き魂がロゴス的探究の厳しさと楽しさを通して、真実によって成長していくことを目指しつつ、人間や社会のあるべき姿を共に求め、これを実現しようとしたのです。彼の『国家篇』は、そのプログラムということもできるでしょう。

この学校から、もう一人の哲人アリストテレスが生まれました。彼はプラトンの精神を深いところで身につけながら、持ち前の観察力と考察力を駆使して、学問の総合的体系化に取り組みました。彼は人間が立派に生きるためには、単なる論理追求だけでなく、存在の構造や宇宙の組織というものをも厳格、的確につかまなければならないと考え、それを自然研究という形で行ないましたが、特に生命の問題に深い関心を払いました。そして、自然を生命の成長や完成に向かって努力している巨大な動的過程として捉えました。

生きているものの目的は、それが与えられている機能をそれぞれのレベルで発揮完成することにある。それは人間にとっては、本能、感覚、感情、意欲を含め、知性にまで至る魂の全機能を適切に伸長展開して、人間らしい生の喜びを発現させることであり、ここに人間の最高の目的たる幸福があると、彼は考えたのです。こうして彼の倫理学、政治学は、生命を結び目として自然の全領域と密接なつながりを持ち、全自然が生命の根源たる神を仰ぎつつ、この世の大目的を追求、実現する人間を頂点として、互いに助け合い、支え合っているという大構想の中での明確な位置づけを持つことになりました。生命の尊厳ということの根拠もまた、そこに見出すことができるでしょう。

〈五〉

以上見てきましたように、タレスから始まるギリシャの哲学は、まず自分の足元からしっかりと考えていくところから出発しました。そして、それを踏み固めつつ、最後には自分自身をつきぬけて、社会を、宇宙を、生命を、またその根源たる神を見るところまで視野を拡大していきました。私たちはここに合理的精神を持って真理を探求しながら、その上に善き生活というものを自他共に実現

預言者は、神との契約関係に基づく兄弟関係の樹立と維持を普遍的な要求として掲げたが、そこには神の行動の根拠は、人間に完全に理解可能であるという価値合理的な態度がある。

しかし、イスラエルの契約関係において注意すべきことは、神がイスラエルと契約を結んだ根拠、またイスラエルが契約を破った場合の神の行動様式については、人間理性の推論がきかない点である。契約思想は、その前提である神の選び、またその帰結である審判と仲裁については、極めて非合理的側面を持っており、ここにもまた、ヘブライ思想の特質があるといわねばならない。

◇川島重成氏――

ギリシャ的な思考の特色は、人間を超えるものが、神々・運命・自然というように、人間世界の多様性に応じて描かれていることである。

ギリシャの特色として、しばしば合理的思考が挙げられるが、ソクラテスの哲学的活動に見られるように、その合理性は、非合理的体験に裏付けられている。ロゴス的活動が、ロゴス的世界で閉塞してしまわないで、ロゴスを超える世界に向かって開かれているのである。

ギリシャの叙事詩や悲劇がわれわれに示しているのは、ギリシャにおいては合理性と非合理性が密接に関わり、お互いに前提し合い、一つに重なり合っている構造を持っているということであり、それが、ギリシャの合理的思考の特質を形づくっている。

◇絹川正吉氏――

ギリシャにおける数学の問題は、プラトンのイデアとは何かという問題に関わっている。彼のイデア論的世界において、幾何学の諸対象は感覚的な個物の領域と永遠的な論理的実在の世界の中間的な存在として位置づけられている。イデア論におけるこの幾何学のもつ中間性は、結局、幾何学が絶対の始源＝イデアとしてではなく、常に超越との緊張を孕んだヒュポテーシス（仮説）として捉えられていることを示している。絶対的なイデア界に措定されない数学が、逆にイデアのもつ超越性を弁証する構造になっている。

（続いての川田氏の講義はフロントページに掲載）

◇荒井献氏――

キリスト教は、ローマ帝国による公認後、自らギリシャ・ローマの哲学や宗教を迫害する立場となり、さらにその迫害の途上において、内部から起こってきたグノーシス主義などの「異端」を隠滅してゆく。

われわれは、キリスト教がその初期から非常に多様性に富んだものであることを認識し、その本質をどの歴史的位相で捉えるかという点に注意しなければならない。「正統」と「異端」というのは、合理と非合理と同様に実体的なものではなく、政治的・イデオロギー的なきわめて相対的なものである。福音書にある受難物語の分析を通してみても、キリスト教には大きな歴史的多様性があり、どれを選ぶかによって、色々な派が成立するのであり、自分で納得できるものを選ぶことが大切である。

◇　◇

プログラム二日目は、前日の講義で提示された問題点を、テキストに沿って具体的に展開、整理する場としての演習の時間に充てられた。紙面の都合上、その全容を報ずることができないのは残念だが、ここにその一部をご紹介しておく。

「ヘブライズムの人間観の根本は、人間が、単なる自然的な関係を超えて、高次の統合において人間となるという点にある。ヘブライズムとは、水平的な人間関係において、新しい人間関係を創り出してゆく立場のことである」（並木）。

「ギリシャ的真理は、ヘブライズムと違い、未来ではなく過去に実在している。われわれ目あきの人間は、本当は真理を知らないで生きているのであり、真理は過去にあったものが、本性として、想起という形で露わにされてゆくのである」（川島）。

「イデア論における数学の位置づけの持つ曖昧さは、イデア論の構造それ自体の揺らぎに由来している。この問題は超越のロゴス化の問題として一般化されるが、超越の合理化は常に緊張を孕んでいる点が重要である。現代の抱える根本的問題は、このプラトンの提示した超越との揺らぎが無意味化していることではないか」（絹川）。

「非合理的なものに対する戦慄、魅了、感動をロゴス化してゆく時点で初期キリスト教における多様性が生まれてくる。一つの絶対＝超越をロゴス化することは、その超越に関する無限に多様なロゴス化を許容することであり、むしろロゴス化が多様になされた方が健全である」（荒井）。

午前9時から午後8時半まで、延べ七時間半にわたった演習は、やや過重なスケジュールではあったが、指導教授の深い学識と真剣な学生の参加に終始支えられ、真摯な対話の場となった。演習終了後の一時間は、レポートをまとめるために用いられた。午後9時半から交友館で懇親会が催され、各先生を囲んで冷たいビールを飲みながら歓談した。

◇　◇

三日目の全体集会では、約二時間にわたって白熱した討論が続けられた。

司会役にあたった中川氏は、開口一番「夜、全部のレポートに目を通して、非常に感動した」との感想を述べられた後、このセミナーを締めくくり、以下のように総括された。「各講義の底に共通に流れていたものは、超越的なものに対して、人間精神がどのように関わってゆくかということであるる。人間による超越のロゴス化には必ず揺らぎがあり、そうした揺らぎにもかかわらず、人間はそれを敢えてロゴス化しなくてはならない。それが人間の知的な冒険であり、また学問成立の場もそこにあるのではないか。」

今回のセミナーのねらいは、現代人としてのわれわれを、その根底から規定しているかに見える西洋的知のあり方への反省を通して、現代の思想的混迷における一つの指標を探る試みにあった。それはまた、「批判の拠点と自分の立脚点としての思想」（並木氏）を、その原点にまで遡って捉え直す試みでもあったろう。西洋精神の二大源流が残したのは、自己を常に真理に向かって鍛えあげてゆく道としての対話的精神と、自己が他者との新しい交わりにおいて生かされるという洞察である。参加学生は、この二つの真実をしっかりと胸に刻んで、この多摩の丘を後にしたことであろう。

していく、一つの典型的な過程を学ぶことができるでしょう。

しかし同時にまた、私たちは自分たちの試みが、あくまで一つの試みにすぎないということを自覚していたソクラテスの精神を学ぶことも大切です。今世紀になって、私たちは先人たちの想像をはるかに越える学問・技術のレベルに達しました。それは確かに、一つの合理性・実証性の尊重の成果でした。しかし同時に、私たちの前に立ちはだかる問題を前にして、私たちは、自らの達した場所を絶対化しようとする誇りにふくれあがることなく、それを絶えず無知の自覚に引き戻して、自分の有限性を深く自覚しつつ、目覚めた心を持って努力を続けていかなければならないでしょう。疑い得ないダイモーンのしるしという一つの事実に注目しつつ、思考を続け、「とは何か」という問を ひっさげて、共に人間の本当のあり方を求めて生きたソクラテスの姿は、いま一つの実証性・合理性を貫いたギリシャ人のあり方であり、依然として今日の私たちに大切なことを問いかけているのではないかと思います。

（第4回大学院共同セミナーの講義および演習より。文責・編集者）

参加者のレポートから

大きく開かれた視野

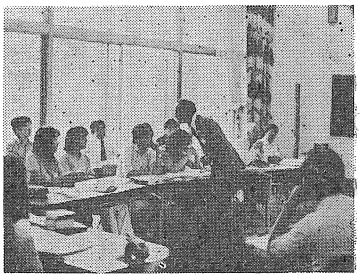
私のヘレニズム・ヘブライズム理解

京都大学・文学D1 長島 律子

このセミナーに参加するまで、私自身のヘレニズム・ヘブライズム理解は、前者を合理性・普遍・抽象と、後者を非合理性・個別性・具体性と漫然と結びつけている程度のものでしかなかった。しかし、まずセミナーの最初から、合理・非合理という概念が、決して単純に二分されるような実体ではなく、また知性によって認識されるものと信仰によって認識されるものという区別でもなく、認識主体の意味づけであることを知らされたことで、ヘブライズム・ヘレニズムの双方に対する視野が大きく開かれたように思った。

イスラエルの預言者における非合理的体験のロゴス化、ギリシャにおける超越的なものとの対面とその合理化、プラトンにおけるイデアのロゴス化の努力、ソクラテスの想起による真理探求、諸福音書記者のイエス認識、これらはすべて、真理を絹川先生の所謂ゆらぐロゴスの中にとらえようとする人間たちの戦う姿を如実に示している。

先生方は一致して超越的なものの存在を認めておられたように思えるが、中でも私には神＝人の応答関係を根拠とする人格神としてのイスラエルの神について述べられた並木先生の講義が一番印象に残った。



古代の対話の再現——学生に語りかける川田殖氏

また、ヘレニズム・ヘブライズムを画一的にとらえてそれぞれにレッテルをはるべきではなく、各の中に認められる多様性をふまえて、共通点・相違点をさぐるべきであると痛切に感じた。

私自身のこれからの研究のためには、ヘブライ的時間性、ギリシャ的空間的広がりとして特徴づけられる認識形態が、どのような必然性のもとに生じてきたのかを自分なりに考えていきたいと思っている。セミナーは、そのための貴重な示唆に富んでいたと同時に諸先生方の熱意ある研究態度に非常に刺激を受けた。

ただ、どうしても私の内部で未だに解決できないのは、ロゴス化の前提となっているべき「信」と、知性の循環論的関係の問題である。「信」なくして知を用いるならば、神の本性までも人間が規定してしまうことになりかねない。また「知」なくして信ずることは人間にはできない。両者のあやうい緊張関係を明白に表わすようなロゴスはおそらく人間には永遠につかむことはできないかも知れないが、このパラドクスをより明確に言い表わす努力を続けるべきであろう。

新たなるロゴスに向けて

ICU・西洋古典学M1 平田 松吾

ギリシャ悲劇を研究している私にとって、古代ギリシャにおける数学、哲学を理解することは、必須であるにもかかわらず、不勉強の故にまったく未知に近い分野であった。それ故、このセミナーにおいて、この分野の〝知見を得たい〟と考え、また、セミナーの申込書の応募理由欄にもそう書いた。川田殖先生の「古代ギリシャにおける合理性と真実性」にも、私は、アリストテレスの自然学に対する知見を期待していた。

ところが、川田先生が、おもむろに教卓を離れ、私たちの机の前を、文字通り逍遙学派の哲人の如く歩きながら語られた内容と、その熱弁に、しばし私は愕然となった。一人一人の学生の目をみつめつつ、まさに語りかけてこられる先生のお言葉に、うろたえながら耳を傾けること約一五分、私は翻然としてノートを閉じた。これはノートをとるべき講義ではない。川田先生は、単なる知見を与えようとしているのではない、古代を研究する私たちの根本的〝態度〟を問うており、私たち一人一人に答を要求しておられるのだ、と直観したのだ。実際、先生が見事に要約して見せたプレソクラティクの哲人たちからアリストテレスに至るギリシャ哲学史は、連綿と継承されていった真知に対する哲学者たちの〝態度〟を、平明な言葉で、しかも熱を以て語られたものであった。先生が冒頭におっしゃった「私の話は、諸先生方の講義の、いわばフット・ノートのようなものです」という発言の意味が、私にはようやく飲み込めた。絹川先生のお言葉を借りれば、真理に対する「揺らぎ」なしに、いくら知見を重ねても、真のロゴスとは決してなりえない、単なるテクネーに過ぎないのだ、と川田先生は訴えておられると私は思う。二日目の演習の時間に、川田先生を中心に繰り広げられたのは、あたかも、古代の対話が再現されたかのような、真摯な問いかけの場であった。川田先生の、対話の創造が無かったならば、諸先生の素晴らしい講義の中核をなす、非合理な体験に揺らぎつつもロゴスの構築を引き受けていくという共通の姿勢を真に理解することはできなかっただろう。

私にとって、この三日間のセミナーは、新たなるロゴスへの大いなるうながしであった。

学問探求がはらむ緊張感の中で

東京大学・宗教学D1 出村みや子

二日間の講義と演習を通じて、いくつかの問いが明らかになってきたが、その中でも一番根本的な問いは、私たちの思考や判断の基盤の問題であった。合理と非合理の枠を固定的なものとして設定して、おのおのの事象を分類し、処理することは、知性の怠慢にすぎない。しかし、その枠自体を今回のようにいくつかの文献に即して問うことにより、多様な事柄をダイナミックに把握してゆくことへと開かれてくる。人間的事柄に対しては人間らしさを持って、学問的事柄に対しては知的誠実さを保って関わる精神のしなやかさがはぐくまれたように思う。少数の、率直な話し合いが、人格的な交流を可能にしたのであろう。

私にとって最も関心を引かれた問いが、諸先生の言われた「超越的なるもののロゴス化の緊張」という問題であった。ヘレニズム世界のイデアのロゴス化の試みは、いったい何であったのか。表現しえないものを、あえて言葉（ロゴス）というぜい弱な器に盛ろうとした意味を、単に固定化した哲学の学説においてではなく、われわれの生のリアリティーの中から一歩一歩手探りをする営みを通じて、わずかながら知ることができたのは喜びであった。さらに単に主知主義にとどまるのではなく、ヘブライズムや悲劇の人間観を通じて、人間の限界性や合理的推論の持つ危険性についてもおのおの考えさせられることが多かった。

しかし若輩の身にとって、学問探求のはらんでいる緊張感、すなわち言い表わしがたいものをロゴス化する営みに関りつつ、自らの立脚点を相対化する目を持つことは、これだけの経験と探求を続けてこられた先生方にして、初めて可能となることであると思われる。心して学びたい。

アンケートに見る反響

○講師の熱心さに感激した。そのことが、今回のテーマであるヘブライズムとヘレニズムを統一する何かを私たちに印象づけた気がする。（筑波大・比較文化3）

法人ニュース

昭和58年度 第1回 共同セミナー委員会

昭和58年6月8日／於・学習院大学創立百周年記念会館

〔出席者〕岡宏子、江沢洋、板垣雄三、熊坂敦子、峰島旭雄、尾本恵市、田中義久、深海博明、山下幸夫、青柳清孝、池上嘉彦、杉田弘子（敬称略）

＊

本年度は、別掲のように四名の新任委員を迎え、二四名の陣容で委員会が発足することになった。

第1回委員会は前記の一二名の委員に、ハウス側から中川館長、飯田名誉館長、吉川専務理事、企画室スタッフ三名が出席して開かれた。

議事はまず、中川館長の開会挨拶、新任委員の紹介が行なわれた後、館長より今年度委員長に岡宏子氏を前年度に引きつづいて推せんしたい旨の提案があり、全員一致で同氏が選出された。岡委員長は、副委員長に黒田道雄、江沢洋両氏を指名し、全員の賛成を得て承認された。

次に報告事項に移り、第123回大学共同セミナーの実施報告が熊坂委員より、準備状況の報告については、第4回大学院共同セミナーが中川館長より、第124回大学共同セミナーが飯田主事より、第6回大学合同セミナーが山下委員より、それぞれ行なわれた。また、AA作家会議から持ち込まれた企画を第125回大学共同セミナーとして実施するに際して、板垣、深海両委員を運営委員に委嘱したい旨の企画室案が出され、両氏の同意を得て承認された。第126回大学共同セミナーは、テーマや講師などの具体案について峰島委員より説明が行なわれ、第127回大学共同セミナーについては、前回委員会の意向で、小田・岡野両委員に運営委員を依頼し、両氏の内諾を得ている旨、主事より報告があり、承認された。

続いて59年度プログラムについての協議に移った。実施回数やセミナーの種類など年間計画の説明が資料に基づいて主事より行なわれ、会食をはさんで種々意見の交換が活発になされた。懸案のテーマを中心に議論をすすめ、担当の運営委員を委嘱して閉会した。

なお、会食は新委員の歓迎と旧委員の歓送を兼ねてもたれた。旧委員の中からは友部直氏が出席され、次のように挨拶をされた。

「昭和52年度から六年にわたった共同セミナー委員の在任中、いちばんの思い出は第3回の芸術セミナーである。現在でも当時の参加者と同窓会をもち、旅行もしている。学生にとっても生涯の思い出となることであり、このような機会を与えてくれたセミナー・ハウスに感謝したい。」

〔昭和58年度共同セミナー委員〕（就任順、敬称略、○印は新任）

＜委員長＞
岡宏子　聖心女子大学教授

＜副委員長＞
黒田道雄　成蹊大学教授
江沢洋　学習院大学教授

＜委員＞
板垣雄三　東京大学教授
熊坂敦子　日本女子大学教授
岡野加穂留　明治大学教授
小田晋　筑波大学教授
前田愛　立教大学教授
峰島旭雄　早稲田大学教授
宮田登　筑波大学教授
阿部謹也　一橋大学教授
尾本恵市　東京大学教授
小浪充　東京外国語大学教授
田中義久　法政大学教授
神吉敬三　上智大学教授
清水徹　明治学院大学教授
深海博明　慶応義塾大学教授
徳丸吉彦　お茶の水女子大教授
戸沼幸市　早稲田大学教授
山下幸夫　中央大学教授
○青柳清孝　国際基督教大学教授
○池上嘉彦　東京大学助教授
○栗原彬　立教大学教授
○杉田弘子　武蔵大学教授

第1回大学教員懇談会 企画委員会

昭和58年6月17日／青学会館

〔出席者〕井早康正、尾田幸雄、柏崎利之輔、川村亮、小池生夫、関口利男、根岸愛子、水島義治、蠟山道雄（敬称略）

＊

昭和58年度第1回委員会が前記九名の委員および、中川館長以下ハウス側の四名の出席のもとに開催された。

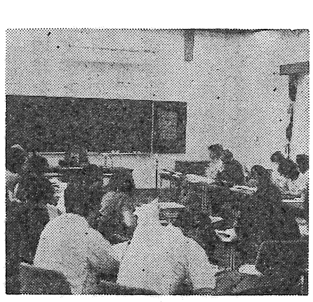
今回の中心議題である第20回懇談会の企画について井早委員長より企画案が示され、さらに吉川専務理事より補足説明が加えられた後、これをめぐって活発な意見交換が行なわれた。審議の結果、「大学教授法のあり方」、「個性のある学生選抜の方法」などを中心に時代の変遷に伴う大学の現状と将来像をテーマに開催することになった。また、運営委員には尾田幸雄、水島義治、根岸愛子、蠟山道雄の諸氏を選出し、具体的人選、プログラムなどはここに委ねられた。

他に、委員の任期に伴う人選の問題、懇談会の開催期日の問題が討議された。前者の問題は現委員および旧世話人に紹介していただくなどして早目に人選していくことに、後者の問題は次年度から急に変更することは困難なので、引き続き諸般の事情を考慮しつつ検討していくことになった。

○諸先生の個性にこれほど感動させられたことはない。各先生との対話は、二日間とは思えぬほど充実した時間を私に与えてくれた。（東大・文化人類M一）

○集まった人々が、それぞれの問題意識をもっており、演習以外の場でも語り合う場が多く、啓蒙されることが多かった。今回のセミナーは、本来、大学が担うべき"アカデミックな場"の提供という点で、素晴らしい企画であったと思う。今は、もっともっと語り合いたいという気持ちでいっぱいである。（千葉大・人文4）

○それぞれ異なる専門分野の先生方が、自分なりの合理と非合理の問題を提示されたにもかかわらず、その内的連関性に驚かされた。合理と非合理という問題を通して明らかにされたのは、人間のロゴスが超越者と出会った瞬間の持つ恐るべき緊張であり、それこそ人間的真理を形づくるものである。（ICU・教養4）



講義をする並木浩一氏

（前略）参加者の人数にも質にもめぐまれ、また私ども講師たちもお互いに――少なくとも私にとっては多大に――教示を受けることができ、また何よりも学生諸君にはソクラテス的問答の再現そのほかで大いにうるところがあったと察せられます。テーマの設定の面からいえば、ギリシャ思想に、聖書の、とりわけヘレニズムを知らなかった旧約聖書の思想をかみ合わせることは、原則的に無理があったという反省が残ります。どうやらテーマの設定では成功しなかったように思いますが、このテーマを見て、ギリシャ思想にもキリスト教にも関心を寄せる優秀な若い方々、それに牧師さんが参加されたのですから、その点ではよかったと思います。（中略）

大学で学生がアトム的存在状況に置かれている状況がこの先解消するようには思われぬ現実の中では、ますますセミナー・ハウスの存在は貴重と思います。ご発展とともに人々の理解の広がりを心より祈念いたします。

七月六日　並木浩一

（企画室主事宛の書簡より）

◆千人会……昭和58年6～9月

◇現在会員は一、六七九名です

大学人＝一、二五八名
社会人＝　四二一名

◇新しく会員となられた方々

四名（第70回報告（申込順））

C　東京電機大学学生課長　川内　脩司殿
C　東京都立工科短期大学教授　八戸　信昭殿
A　㈳日本ブラジル中央協会　大平　定雄殿
B　㈳日本語教育学会専務理事　木村　宗男殿

◆会費ありがとうございます

松井源吾、鈴木二郎、相沢忠一、川名明、小畠守生、藤井耕一、板倉譲治、古畑和孝、福田延衛、柴垣和三雄、荒川有史、竹内喜夫、福山直美、宮崎昭子、高柳暁、黒田成俊、中山昌、石川孝夫、柴田恭二、島田淳子、石川修二、野沢浩、和田英一、小倉充夫、合田周平、石田雄、大内力、秀村欣二、江沢洋、道喜美代、長岩寛、奥村敏恵、宅間宏、嶺哲之助、上田初子、栗林恒雄、望月恵美子、阿久津喜弘、金子晃、川島順平、吉田幸弘、関口忠、市井三郎、長清子、都留春夫、名東孝二、武者利光、見目洋子、横田忠夫、中村幸安、伏見康治、朱牟田夏雄、西川治、玉田美芳、中野スミ子、川田侃、長澤孝廣、吉松藤子、臼井久和、三浦徳弘、讃岐和家、高橋勇悦、柴田政利、辻達也、厚東偉介、北野美枝子、高橋忠次郎、川田雄一、犬塚博、内山尚三、中村哲哉、山本襄治、石井進、詫摩武俊、黒田道雄、色川大吉、三橋文雄、慶谷伸代、山代昌希、浅川淳、川内脩司、見田宗介、奥田真文、栗原尚子、本田和子、柏木恵子、林俊一、梅沢豊、松原治郎、高橋公雄、松島恵、田島恵児、岡沢憲芙、藤平重雄、高橋彰、外山敏子、笹森健、中村進、和田義信、福田歓一、中村浩三、中川一朗、安藤良雄、小林宏晨、小池滋、十代田知三、鳥海俊宏、綿引二郎、児玉久雄、矢部章彦、柴田誠、藤原鎮男、山本尚志、角瀬保雄、小西悟、古本捷治、山井湧、松崎奈岐、鈴木務、坂田道太、橋本智、簗田長世、三宅彰、鈴木成文、奥田夏子、布施濤雄、橋本研一、米村貞蔵、有末賢、吉田美穂子、小川信子、岸英朗、石川馨、谷下市松、川原啓美、川合隆男、千住鎮雄、太田善麿、田中庄蔵、小池生夫、安宅光雄、中島文夫、佐野幹夫、滝幸三郎、朝日信夫、原誠、永井裕、菊地雄二、高村象平、三和治、芥川龍男、村上光雄、山西貞、石井竹松、大吉芳彦、鹿島健次、石川達雄、藤井隆、稲田拓、村松暎、山岡喜久男、佐藤誠三郎、熊田禎宣、浅井邦二、寺沢徳雄、市川博、井出翕、大平定雄、小沢重男、井上孝、柳下綱道、山本武彦、志賀英、時枝満康、大野泰雄、荻原洋太郎、原田行男、宮野三郎、米山弘、山口重克、小谷友紀子、村上直、岡本剛、山田耕司、山本芳夫、平井久、花島重春、福島正久、松村信治郎、小林祐子、小田切松義、福山仙樹、中川重雄、伊藤一郎、加藤栄一、倉沢進、松平文朗、渡辺昭夫、神山四郎、国岡昭夫、海老沢克之、橋口英俊、竹下敬次、高橋康之、白浜謙一、佐野晃、木村宗男、林勲、朽津耕三、武藤英輔、岡村文子、伏見弘、井手久登、市川節子、武澤信一、下田弘、若槻泰雄、圭室文雄、榊原祐輔、坂本清、押田勇雄、片山覚、楢林博太郎、原島幸太郎、片山清一、小菅東洋、市川惇信、永井克孝、古賀正則、新井勝紘、太幡祐己、田中弥寿雄、藤永光之、松本健次郎、井深淑子、神保信一、西村善四郎、松田武彦、岡村甫、石村善助、古屋野正伍、高村多賀子、高村弘毅、森口繁一、横山宏、宮坂宏、松尾登、原口隆英、谷俊治、田端光美、中村克孝、大沢綱一郎、島岡丘、長松昭男、稲垣寛、松田徳一郎、千葉正士、小林忠義、鈴木忠義、鈴木守、小田切美文、岩崎不二子、脇田良一、池上秋彦、坂本義和、安嶋彌、出居茂、西野万里、吉利和、東寿太郎、塩見利夫、小堀桂一郎、伊能敬、久武雅夫、河野恵、鈴木俊和、麓信義、岡茂男、加藤一郎、大河内繁男、三村卓雄、西川潤、太田秀通、松井共子、岡田正弘、坂野正高、北村嘉行、阿部斉、石川信男（敬称略）

●寄付金報告

58年6～9月

＜教育プログラム資金＞

二、000円　岡山猛殿
二、000円　河田喬夫殿
一0、000円　第11回大学合同セミナー参加学生一同殿
一四、000円　第4回大学院共同セミナー参加学生一同殿
三、000円　第4回大学院共同セミナー指導教授　並木浩一殿
三、000円　同　阿久津喜弘殿
五、000円　同　絹川正吉殿

＜一般寄付＞

一0、000円　大澤クライッグゼミ殿
五、000円　明星大学通信教育部　夏期スクーリング学生一同殿

＜現物寄付＞

壁掛時計　大学英語教育学会第17回夏期セミナー参加者一同殿

＜植樹資金＞

一0、000円　文教大学女子短期大学部殿

●寄贈図書

昭和58年1～5月

「Asian Culture」33～34　ユネスコ・アジア文化センター殿
「金融経済」197～198　金融経済研究所殿
「Energy」21　エッソ・スタンダード石油殿
「一般教育学会誌」6～7　一般教育学会殿
「暴力の起源」　尾本惠市殿
「ロミラのゆめ」　金田常代殿
「アジアの友」11・12月号　アジア学生文化協会殿
「新しき村」　安達義明殿
「日本女子大学の80年」　日本女子大学殿
「東京女子大学数学専攻科50年の歩み」　数専会殿
「国際協力」12～3月号　国際協力事業団殿
「大学時報」167～168　日本私立大学連盟殿
「日本の大学改革」「素顔の学生たち」　尾形　憲殿
「現代詩」306　現代詩研究所殿
「紀要：第一集」　日本大学今泉研究所殿
「近代イギリスの経済思想」　山下幸夫殿
「松下政経塾報」　本間正人殿
「杉野女子大学紀要」　田村皖司殿
「東海大学短期大学紀要」　同大医療技術短期大学殿
「広告、もうひとつの科学」　小林保彦殿
「郷土の自然史」　かたくら書店殿
「人間心理と宗教」　久保田圭伍殿
「自分を読む精神分析」「夢分析」他二冊　小川捷之殿
「大学研究ノート」55　広島大学大学教育研究センター殿
「紀要」第14集　日本大学精神文化研究所殿
「早稲田法学100周年記念号」　同大法学会殿
「大学入学者選抜に関する研究調査」　私学教育研究所殿
「AJALT」6　国際日本語普及協会殿
「研究所報」8　法政大学日本統計研究所殿
「協会50年史」　日本ブラジル中央協会殿
「総研論集」4　関西学院大学総合教育研究室殿
「地球をめぐる風」　廣田　勇殿
「文学と風土」　福田陸太郎殿
「日本の政治文化」「平和と変革の論理」　石田雄殿
「学習社会の成立と教育の再編」　松原治郎殿
「キリスト教美術の誕生と展開」　聖心女子大学キリスト教文化研究所殿

●事業部だより

58年6・7・8・9月 ―夏のキャンパスから―

春4・5月連日のように繰り広げられた新入生オリエンテーションも6月は下火となり、7月中旬には一段落。引き続いて夏休みの多彩な諸集会を迎え、特に7月後半から8月前半にかけては宿泊者三〇〇人前後の日が多く、ハウスの最盛期である。そして夏休み終盤の9月は、今年も、多い日には計一六グループといったゼミ合宿の集中ぶり。――以上は毎夏同様の利用の態様であるが、今年は6月に米国諸大学からの大勢の若者たちで賑わうという〝異変〟が生じた。日本と日本式経営を学ぼうとする二つの訪日研修グループの来泊を迎えたためで、特筆すべき出来事である。

【夏季四ヵ月の利用状況】

	グループ数	宿泊延べ人数（人）	定員比（%）
6月	六四	四、二三九	五二
7月	一〇〇	六、〇七〇	七三
8月	九九	六、九五九	八三
9月	一四六	五、一三四	六三

●新入生の合宿

6・7両月中に実施された新入生合宿研修でクラス単位以上の規模のものは、**別表**に示すとおりである。前号（86号）に掲載の4・5月分と合わせ、今季のオリエンテーションの実施状況をご覧いただきたい。同四ヵ月間に行なわれた大学関係の新入生合宿は計二九校（五四件）、参加者数は六、八七六名（うち教職員五七三名）、延べにすると八、二〇二名となる。なお6・7両月には、白梅学園短大保育科とお茶の水女子大全一九学科が、例年同様前後二班に分かれての〝全群使用〟の合宿を実施された。ともに十数年来の伝統の行事である。

●個別大学の諸集会

個別大学の利用の中には、圧倒的に多いゼミナール合宿（10ページ以下の「利用状況」参照）の他に、もうすっかりこの季節の〝顔〟となった恒例の集会が少なくない。

芝浦工大建築科2年生の「八王子ゼミナール」、京浜女子大「多摩丘陵の動植物観察」、千葉大「医用電子工学研」、法大「技術連盟」、山梨英和短大「英文学セミナー」、立大「集中合同講義」、東京理科大「建築計画ゼミ」、津田塾大「学内ITC」などである（**左掲**の英文は参加者の一人が寄せてくれた感想文である。10日間の集中訓練の一端をご覧いただきたい）。

一橋大「外国人研究留学生社会科学基礎セミナー」（一九ヵ国・三〇名）は昨年に次いで二回目。社会科学専攻の留学生（大学院レベル）に、現代日本の政治・経済・社会についての全般的な基礎知識を習得させることを目的とする三泊四日の合宿セミナーで、今回は関西地区からの留学生も参加している。

なお、本号の『わたしたちの合宿』には、今年で一三年目の東京学芸大「文章研究セミナー」夏の合宿にご登場願い、長年の千人会員でもあられる永野賢教授に**別掲**（11ページ）の一文をお寄せいただいた。

到着後，丘の小道を通って食堂へ向かうお茶の水女子大の新入生たち

●学術教育団体の集会

大学英語教育学会の第17回夏期セミナーは一〇泊、英語教育協議会は六泊、そして東京都高等学校英語教育研究会。いずれも外国人講師を交えての英語による合宿である。文学教育研究者集団の第32回全国集会は、今年も8月6日の広島原爆記念日をはさんで三泊。同日朝8時15分、広島からの参加者が教師館屋上で真理の鐘を点鐘した（12ページ「再び八・六の鐘をつく」を参照）。

●夏の交歓風景から

この夏も全国各地から、そして海外からの来泊者を迎え、様々な形の交歓風景が繰り広げられた。交友館サロンでは、訪日研修グループ、大学英語教育学会、一橋大研究留学生合宿研修などの歓迎や送別、あるいは懇親の夕食パーティが開催されている。二四ヵ国からの外国人日本語教師たちが、それぞれお国の歌を出し合い、また共に日本語の歌をうたう感動的な光景は今年も再現された。

遠来荘では、海外からの訪日団が民家見学を兼ねた茶道体験と地元奉仕者との交流を楽しんだ。なお、この夏は内外の来泊者計一五九名が月例の〝茶道教室〟に参加している。

夕食時の食堂では、外国人留学生が紹介され、常連の教師が感想を語り、またある時は千葉大大学院合唱サークルが宗教曲を、津田塾大ITCが英語の歌を披露した。また中秋の名月には月見ダンゴが供され、全員が合唱するなど、在泊者は〝大学共同の広場〟での交流を楽しんだ。

昭和58年6・7月
新入生オリエンテーション実施状況

大学名	参加者数
●6月	
東京都立大・法学部	93（5）
津田塾大・数学科	131（11）
東京都立大・化学科	97（13）
白梅学園短大・保育科	*155（15）
白梅学園短大・保育科	*180（12）
日本女子大・家政経済学科	89（5）
●7月	
東京都立大・機械工学科	53（6）
電気通信大・物理工学科	54（5）
お茶の水女子大・文教育学部（11学科）	230（27）
お茶の水女子大・理・家政学部（8学科）	225（21）
計　10グループ	1,307人（120人）

（注）参加者数の（　）内は内数で教職員。＊は2泊，他は1泊。
実施順。4・5月実施分は本紙前号に掲載。

"SIMPLE LIVING AND HIGH I. T. C"

多摩の丘での1週間の英語生活

First of all, please excuse me for writing my idea in English, because I feel it is more natural for me now.

At first, I found it hard to srart conversation in English. I had somewhat strange feeling. Besides, there were many students from other universities. But after a few days, we got used to talking in English, and we could do so whoever was around us.

I think the surroundings of this House is wonderful. But there is one problem. Noise of the airplane! It bothered us quite often. I was very sorry.

I enjoyed the comfortable life here very much. The staff were very friendly and helpful. Thank you very much for everything. We are looking forward to visiting here again.

Chizu Kanada
1st year, Eng. Dept.
Tsuda College

米国20大学から 二つの日本研究セミナーを迎える

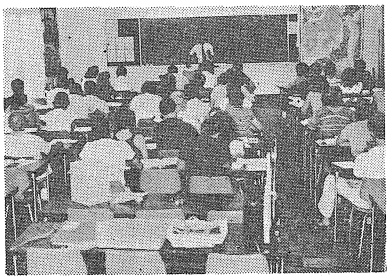
最近、欧米の学生の間に〝日本式経営〟に対する研究熱が高まっており、企業等の実地見学を組み入れた訪日研修がブームになっているといわれる。産業能率大学(経営の国際化にかかわる研究と事業に取り組んでいる)と国際教育交換協議会(米国に本部を置く世界的な大学連合組織)が米国大学の夏季休暇に合わせて、ほぼ同様の趣旨のセミナーを企画した。後者は受け入れの母体(Sponsoring organization)として、当大学セミナー・ハウスおよびハウスの国際プログラム委員会が協力することになり、参加者には同委員会の中嶋嶺雄委員長より、修了証が手渡された。

これらの二つの訪日グループはくしくも梅雨空の6月なかば相次いで米国から到着した。双方を合わせると、参加者は米国各地の二〇大学から六二名(うち同行の指導教授七名)となり、ハウスはにわかに米大学のキャンパスの観を呈した。以下、参加者の感想文と写真を織りまぜながら、両グループの研修の模様をご紹介したい。

I 海外学生訪日研修団

1983 International Seminar on Japanese Business and Management／6月13～27日(一四泊)／主催＝産業能率大学

欧米諸国の学生に日本と日本企業の理解を深めてもらおうと産能大が初めて試みた夏期国際学生セミナーである。第一段階として本年は米国人学生(経営学専攻者を中心)を対象に六週間のプログラムが企画され、ハウスではその最初の二週間の合宿研修が行なわれた。参加者はニューヨーク大、アパラチア大など九大学からの五一名。「日本文化」「日本人の価値観」「日本企業の意志決定過程」「日本的企業経営」などについて内外の講師から講義を受け、またその合間には一般市民との交流、日本舞踊、花道、剣道などのデモンストレーション、高尾山や鎌倉への遠足などの〝課外活動〟にも積極的に参加。なお、プログラム後半では松下電器産業、トヨタ自動車、サントリーなど企業への見学が組み込まれていた。



J・ベイリー教授から日本歴史の講義をきく。――産能大グループ

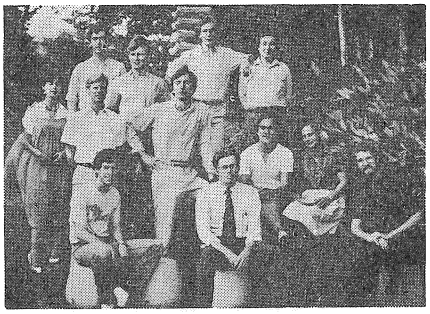
II 米国大学日本研究夏期講座

Japanese Business and Society Program 1983／6月18日～7月30日(四一泊)／主催＝国際教育交換協議会(CIEE)

この企画の推進者であり運営の中心でもあるプログラム・ディレクターは、国際プログラム委員会副委員長の成蹊大学教授広野良吉氏がつとめられたが、同委員会からは、菊地靖、阿部美哉の両氏も講師陣に加わられ、当ハウスは〝共催団体〟としての役割を果たした。

参加者一一名の大学は次のようである。ペンシルベニア大、ミシガン州立大、南カリフォルニア大、マサチューセッツ大、シカゴ大、ワシントン大、ジョージ・ワシントン大、ミネソタ大、ジョージア州立大、カルフォルニア(リバーサイド)大、ミシガン大。

プログラムは午前中が講義、午後は本田技研工業、三井物産、キッコーマンなどの企業訪問が連日組まれた。四一泊という長期研修であったが、最初の一週間は前述の産能大グループと〝同宿〟し、日本文化紹介のプログラムに合流したり、またハウス主催の遠来荘茶会やパーティーに招待されたりして、合宿の終りにはハウスの職員ともすっかり顔なじみになった。



六週間の研修を終えて――CIEEグループ(交友館前庭、前列中央はB・シムコック氏、II-①の筆者)

I

The Seminar House in conjunction with the beginning lectures was an ideal setting. The surroundings reinforced the Japanese' love and appreciation for nature. I was better able to understand the Japanese culture and society by just looking around than if I were to read it in a textbook.

Brian J. McCarthy
New York University

When I first arrived at the Seminar House, I was doubtful about my decision to study in Japan this summer. The place was not what I had expected. However I have come to respect the choice of residence for the first two weeks. I think there was an educational lesson in that choice and the area around the Seminar House offered much to students wanting to learn about Japan and its people.

Concerning the lecture and planned activities by Sanno, it is obvious that much preparation was made for our stay there. Although there were a few lectures that were boring, for the most part I learned a great deal about Japanese business and the people who run them.

Glenn W. Zimmerman
Appalachian State University

II-①

Seminar House has proved to be a very good location for our program this year.

Tokyo is a very fast paced and demanding city to live in. Seminar House was a respite from those demands, a place for rest and revitalization during a very strenuous schedule of field trips.

The scenery and grounds are well kept, the staff has been very helpful, and contacts with other Japanese citizens has been facilitated by Seminar House.

I would recommend Seminar House to groups seeking a place for intellectual and academic retreat activities of all kinds.

Bradford Simcock
Resident Director, JBSP 1983
Professor, Miami University

日本語で綴ったハウスの風物誌

海外日本語講師研修会の参加者による

国際交流基金主催の海外日本語講師研修会が、一昨年、昨年につづいて今年もハウスで行なわれた。世界諸地域二四ヵ国の大学等で日本語教育に従事している外国人教師五九名が、滞日一ヵ月の最初の一週間をハウスで合宿し、日本語及び日本語教授法、日本事情について集中的な研修を受けた。

7月5～11日の七日間に及ぶ研修ぶりを参加者に綴っていただいたので、日本語学習の成果の一端としてここにご披露したい。

幸福な一週間

ブルガリア・ソフィア大学日本語講師　S・ミレバ

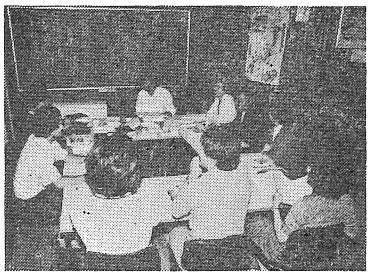
日本文化に触れて――茶道体験（遠来荘）

ソフィアからロンドン・アンカレッジ経由で約二三時間も飛行機の中で過ごした後、やっと成田空港に到着しました。若い頃の懐かしい思い出の東京が見えて来た時は、本当に胸がほっとする思いでした。

ところが、ホテルへ着いてみると、研修会の皆さんと八王子の大学セミナー・ハウスで一週間勉強することを知り、実は少々がっかりしました。

しかし、八王子へ着いて見れば、思ったより美しく、心地の良い所でした。そして、世界中から集まった見知らぬ私達がいつの間にか友達になり、夜遅くまで、語りあい、笑い、歌い、楽しい時を過ごす事が出来ました。考えて見れば、自分の学生時代、先生達と一緒に学生ハウスで楽しい共同生活を送った事や、大学の寮での愉快な日々は、今でも楽しい思い出として心にのこっているのです。なるほど、国際交流基金の皆様が私達の事をそこまで考えていて下さったのです。

七夕の短冊にも「日本語がもっと流ちょうに…」などの願いごとが（本館ロビー）



分団で日本文学の特訓を受ける（国際セミナー館）

自然に囲まれ、先生方の興味深い講座から、遠来荘での茶道、ハウスの皆様のやさしい心のふれあい、雨にもかかわらず、すべてが幸福の一週間でした。

セミナー・ハウスに感じたふるさとの郷愁

韓国・蔚山工科大学専任講師　雀光祐

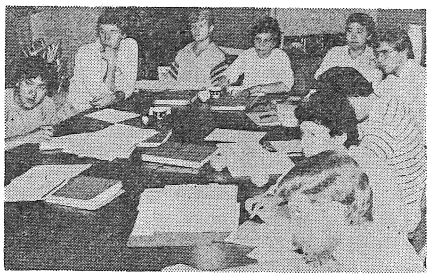
八王子から帰って来てバスから降りたった時、何か胸にじんと来るものがあった。それは瞬間的に思い出された大学セミナー・ハウスに対する郷愁だった。

混雑した都心を離れて小雨のぱらつく八王子に着いた時、風変りな本館と山荘のような講堂そして宿舎はかえって寂しさを抱かせるほどだった。しかし翌朝になってそれは杞憂に過ぎないのに気がついた。上品でこぢんまりした食堂での対話は、不規則なホテルあたりでの生活とはまったく異なるものだった。

不幸にも終わりまで続いたぐずついた天気でこんもりした緑陰のありがたさを思い切り楽しめなかったことは残念だったが、静かな散歩道や夜明けの枕許に聞こえてくる鳥のさえずりはふるさとの思い出を蘇らせるに十分だった。

それとは別に、活気に満ちた講義はそれなりに意味が深かったし、暇を利用した各国の人々との対話はセミナー・ハウスならではの楽しみだった。いろいろな国の風習、生活、言語など互いの関心事を話しあうことでみなが一つになり、知らず知らずのうちに友達になっていた。

日本語という一つの共通の道具を通じて一週間の生活から得た一体感は、これからの生活をもっと豊かにしてくれる原動力になるだろう。



"日本式経営"を学ぶ――CIEEグループ（第5セミナー室）

Ⅱ-②

The natural surroundings have allowed an opportunity to relax and reflect after a rigorous and often hectic day in the busy streets of Tokyo.

The staff of the Seminar House have shown the greatest kindness and consideration in assisting in our daily needs, whether it be placing phone calls or serving a little first aid in the form of "beer".

The plain living has been instrumental in bringing the members of JBSP closer together to form our own little family.

Douglas Romaniak
George Washington University

"Plain Living and High Thinking" at the IUSH has given me the chance to come in deeper touch with both my soul and an ancient culture full of wonder. Set on scenic hills above Hachioji, away from the hustle and bustle of urban distractions, IUSH has given me time and opportunity to meet many interesting people, to focus on our subjects, and even to confront those greater questions that are the "mysteries of our lives"—such as: Why am I here on earth, what is the purpose of my life, who am I? Ancient philosophers have all admonished us to "Know Thyself". Although I feel this is really a lifelong process, I feel, too, that after my time here at IUSH, I have taken one step closer to this deeper understanding.

Carl Swanson
Georgia State University

●利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用
日帰り利用者を除く

■6月

（64グループ、延四、二三九人）

東京都立大法学部新入生歓迎合宿
学習院大シェイクスピア劇研究会
東京工業大学助教授　宮嶋　勝
津田塾大学数学科フレッシュマン・キャンプ
東京都立大学化学科オリエンテーション　那須　宗一
中央大学教授
明治大学雄弁部政治研究会
一橋大学教授　竹内　啓一
東京家政大学教授　宮崎　照子
東京学芸大学教授　小川　仁
白梅学園短期大学保育科新入生オリエンテーション＊　高窪　利一
中央大学教授　朝倉　孝吉
成蹊大学教授　五味　健吉
法政大学教授　神田　博司
中央大学教授　沖塩荘一郎
東京理科大学教授
日本女子大学家政経済学科新人生オリエンテーション　長岡　亮介
津田塾大学講師　森岡　清志
東京都立大学講師　横田　英嗣
東海大学教授　稲崎　一郎
慶応義塾大学助教授　廣田　明
法政大学助教授　金山　行孝
法政大学教授　速水佑次郎
東京都立大学教授　村越　邦男
中央大学助教授　大槻　健
早稲田大学教授
東京大学不知火海総合学術調査団　横山　実
国学院大学助教授　相馬　順一
桜美林大学助教授　奈良　俊夫
独協大学助教授　玉川大学教授　若槻　泰雄
専修大学教授　正村　公宏
産業能率大学海外学生訪日研修団
国際経済商学学生協会
第11回十大学合同セミナー
国際教育交換協議会（米国大学日本研究夏期講座）
最適設計セミナー
日本建築学会農村計画委員会
日本青年会議所関東地区東京ブロック協議会
建築セミナー
早稲田奉仕園ＯＢ会
国立西埼玉中央病院附属看護学校
アイワールド＊＊＊＊＊
日本情報技術研究所
日本トラベノール
小西六写真工業＊
日本フードサービスチェーン協会
国際交流サービス協会
日建工学
マンダム
三菱鉛筆
カルビー
富士電機製造
（個人利用）
慶応義塾大学学生　伊藤　和憲
大阪市立大学教授　持田　照夫
小松インターナショナル製造　田中　浩
平八亭　新　勇

■7月

（100グループ、延六、〇七〇人）

中央大学教授　工藤　恒夫
法政大学教授　相田　利雄
学習院大学物理科理論研究室
立教大学教授　岡本　伸之
東京都立大学機械工学科新入生オリエンテーション　桐敷真次郎
東京都立大学教授
電気通信大物理工学科新入生研修
駒沢大学助教授　谷敷　正光
東京大学教授　塚本　健
東京学芸大学助教授　足立美比古
東京都立大学助教授　鈴木　浩平
駒沢大学講師　福田　耕治
中央大学教授　石崎　忠司
共立女子大学教授　藤木　宏幸
東京経済大学助教授　島田　和夫
駒沢大学教授　金関　寿夫
千葉大学助教授＊　武蔵　武彦
横浜国立大学教育学教室
東京都立大学助教授　鳴澤　實
国際基督教大学講師　山口　和孝
お茶の水女子大新入生セミナー＊　村田　晴夫
武蔵大学教授
武蔵大学教授＊　佐野　晃
芝浦工業大学建築学科２年八王子ゼミナール
東京外語大助教授　伊豫谷登士翁
東京都立大学地形学研究会
東京都立大学教授　関口　晃
早稲田大学教授　川原　栄峰
帝京大学教授　澤口　進
慶応義塾大学教授
中央大学教授　檜谷　昭彦
駒沢大学助教授　山下　幸夫
東京外国語大学教授　森　武麿
東京大学教授＊　竹内与之助
東京大学教授　見田　宗介
東京都立大学都市計画研究室　渡辺　昭夫
武蔵大学教授＊　渡辺　勉
駒沢大学助教授　瀬戸岡　紘
中央大学講師　松田　幹夫
中央大学教授　池田　正孝
東京大学教授　高橋　徹
成蹊大学教授　宇野　重昭
東京大学教授　菊地　昌典
東京都立大学講師　金井　彰
早稲田大学韓国語講座
早稲田大学講師　深沢　実
明治大学教授　喜多　登
法政大学助教授　船橋　晴俊
学習院大学音楽愛好会リコーダーゼミ
順天堂大学地域予防医学研究会
青山学院大学教授　岸　英朗
青山学院大学助教授　関田　寛雄
青山学院大学教授　深沢　実
慶応義塾大学人間科学研究法Ⅳ
早稲田大学理工学部英語会
中央大学瑞法会研究室
東京大学宮本ゼミ学習会
明治学院大学教授　尾崎　朔
慶応義塾大学ビブリオメトリックス研究会　藤井　良治
千葉大学助教授
上智大学心理劇研究会
日本大学ニューメディア研究部会
中央大学通信教育部
明星大学通信教育部
横浜商科大学岡田・稲垣・村上連合ゼミ
和光大学職員合同合宿研修
京浜女子大学夏季自然講習会
独協大学教授　林　俊一
専門学校桑沢デザイン研究所
東京松本英語専門学校ＮＰＧサマーキャンプ
東京松本英語専門学校ジェネレーション
日本女子大学附属高等学校高校生活研究セミナー
成城高校ラッセルグループ
都立片倉高校夏季学習会
第４回大学院共同セミナー
立川市姉妹市青年クラブ
国際教育交換協議会（米国大学日本研究夏期講座）
朝日カルチャーセンター・横浜
日本教会成長研究会
朝日カルチャーセンター
国際交流基金（海外日本語講師研修会）
日本ブラジル中央協会
文学教育研究者集団
品川区教育相談センター
日電アネルバ
小西六写真工業＊
アイワールド＊
富士通興業
日本フードサービスチェーン協会
（個人利用）
東洋大学教授　堀　光男
慶応義塾大学助教授　松居　司

■8月

（99グループ、延六、九五九人）

明治大学教授　播　里枝
東京理科大学教授　伊丹　邦夫
東京学芸大学講師　出口　利定
東京外国語大学教授　山之内　靖
成蹊大学教授　宇野　重昭
聖心女子大学教授　的場　淳子
杉野女子大学講師　大久保正健
東京学芸大学助教授　宮腰　賢
法政大学教授　田中　義久
東京理科大学教授　大澤綱一郎
青山学院大学助教授　寺東　寛治
中央大学通信教育部
東京農工大学教授　原口　隆英
東京農業大学講師　滝田　聖親
慶応義塾大学理工学部ＥＳＳ
大妻女子大学助教授　中村　悦子
東洋大学助教授　稲木　哲郎
上智大学Ｉ・Ｔ・Ｃ
東京農業大学教授　西郷　光彦
慶応義塾大学経済学部加藤研究会計画パート＊
東京工業大学光通信研究会
明星大学通信教育部
横浜国立大学ＥＳＳ
大妻女子大学講師　宮崎　清孝
慶応義塾大国際軍縮促進学生連盟
国際基督教大学教授　井上　和子
明星大学通信教育部Ⅱ　田中　拓男
中央大学教授　石村　善助
東京都立大学教授
千葉大学医用電子工学研究会

■わたしたちの合宿■

一年中でいちばん充実した時間

――一三年目を迎えた「文章研究ゼミ」夏合宿

東京学芸大学教授　永野　賢

私の書斎の机の上に、濃緑色の扇型の文鎮が置いてある。表にはPlain Living and High Thinking/Seminar House の文字が浮き彫りに彫られている。開館十周年の記念品として頂戴したものである。この「思想は高潔に、生活は簡素に」というモットーは、私どもの文章研究ゼミの理想に直結する。

ゼミの夏の合宿が大学セミナー・ハウスに定着してから今年で一三年になる。毎年八月下旬に二泊三日、ときまっている。ゼミのメンバーは、当初学部の学生だけであったが、いまでは大学院生、現職教員の研究委託生（いわゆる内地留学生）、それに外国人留学生なども加わって多彩である。

私のゼミは、毎週木曜日の夜、放課後二時間ほど行なっている。共同研究と自由な討論に、時折り私の講義を交える。それを年に一回の合宿に凝縮させるのだから、わずか二泊三日ではあっても、好きな領域の勉強にだけ打ち込める幸福感が、学生の言動に現われる。一年中でいちばん充実した時間である。

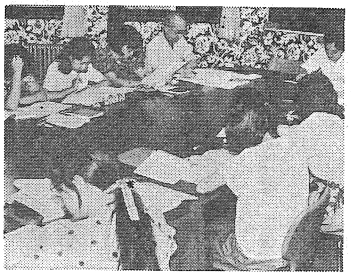
夏の合宿がハウスに定着した最大の理由は、市街地の騒音を離れた環境で寝食を共にしながら学問の原点に立ち戻ることができる、というところにあった。知的な雰囲気のただよう中に魂の故郷を探り当てたような安堵感があったのである。

しかし、毎年ハウスを訪れるたびに、何かが少しずつ変化しているように感じられてならない。いま十数年前を思い返してみると、まぎれもなく大きな変貌が訪れていることに気づく。一言で言えば、セミナー・ハウスも俗化の傾向から逃れることはできないということである。開館当初は、たとえば朝食堂に向かう道で他のゼミの人たちに会ったとき、「お早うございます」のことばが自然に口をついて出たものだ。それは決して強制されたものではなかった。いまは、それがない。

私は自由主義者だから他人の自由を尊重するが、学問の聖域とも言うべき場所を、ホットパンツで横行する人たちの気がしれない。具体的な事例を一々数え上げることは避けたいが、ハウスも最近俗化したというのは、実感である。十数年前と〝いま〟とを比較してみると、否めないことだ。形は単なる形ではない。いいものは残していきたいと思うのは、私だけであろうか。

交友館の窓から臨まれる多摩丘陵に宅地開発の波が顕著に押し寄せている現実と、右の事実とは無関係ではあるまい。嘆かわしいことだが、昔を今になすよしはないものだろうか。

それでも、私どものハウスを愛する気持ちにはいささかの変貌もない。



学生による研究発表。中央が永野教授（第3セミナー室）

東京都立大学教授　桐谷　維
武蔵大学教授　渡辺　勉
東京都立大学講師　山川　仁
一橋大学経済学部自主ゼミ
日本大学人口研究所高等教育問題研究会
武蔵大学・東京家政大学合同エンカウンターグループ
東京都立大学教授　清水　誠
東京都立大学助教授　井出　弘之
千葉大学合唱サークルシュトルム
東京家政大学臨床心理研究会
東京学芸大学教授　永野　賢
青山学院大学教授　羽田　三郎
中央大学助教授　石川　敏行
大妻女子大学助教授　森住　衛
一橋大学外国人留学生社会科学基礎ゼミナール
東京大学社会科学研究ゼミ
東京大学助教授　山本　泰
産業能率短期大学英語会話合宿集中授業
白鷗女子短大教授　上原　孝吉
新潟大学教授　長塚　康弘
東電学園大学部夏季ゼミナール
和洋女子大学助教授　清川　英男
日本ルーテル神学大学助教授　中村　克孝
八王子室内オーケストラ
日本国際学生協会
全国医科系聖研合同修養会
原子衝突若手の会
集合論サマースクール
華族研究会
学生YMCA夏期ゼミナール
語学教育振興会
大学英語教育学会
日本商品学会関東部会
小平伝道教会
文学教育研究者集団＊
上智大学カウンセリング研究所
都研究員算数グループ
東京都高等学校英語研究会
聖書キリスト教会
慶応義塾大学中村ゼミOB会
子どもとつくる生活文化研究会
恵みバプテスト教会
英語教育協議会
日本ナチュラリスト協会
全国学校図書館協議会
多摩地区看護学校教官研修会
東京八王子中央ライオンズクラブ
（中国青年学生訪日団）
日本作業療法士協会
朝日カルチャーセンター
社会教育推進全国協議会
国立教会聖歌隊
アイワールド＊＊
小松ゼノア
日本フードサービスチェーン協会
富士通興業
そごう
小西六写真工業
日建工学
日本電気
〔個人利用〕
東京都立大学教授　奥山　典生
慶応義塾大学助教授　松居　司
東京薬科大学助教授　長坂　達夫
大東文化大学教授　藤木　登
東京理科大学教授　狩野　紀昭
文教大学助教授　笠井　勝子

■9月

（146グループ、延五、一三四人）
横浜国立大学講師　青柳　肇
東京都立大学教授　東　洋一
東京都立大学助教授　井堀　利宏
東京都立大学教授　長倉　康彦
青山学院大学教授　國岡　昭夫
大妻女子短大助教授　森住　衛
成城大学講師　小森　陽一
成城大学教授　中西　進
中央大学バレーボール部
相模女子大学教授　清水ちか子
早稲田大学ローバース
慶応義塾大学英語会＊
明治大学教授　薗出　硯也
中央大学教授　竹村　孝雄
明治学院大学教授＊　舘　逸雄
大妻女子大講師　J・K・BUDA
学習院大学教授　斎藤　孝
千葉大学教授　地主　重美
一橋大学社会科学ドキュメンテーション研究会
横浜国立大学教授　楠井　敏朗
法政大学伊達ゼミ司法研究会
法政大学教授　花香　実
東京女子大学教授＊＊　佐久間孝正
津田塾大学教授　笠原　乾吉
早稲田大学理工学部英語会
早稲田大学教授　白井　克彦
成蹊大学法学研修センター研修部
学習院大学助教授　高橋　利宏
相模女子大学表千家茶道部
法政大学学友会技術連盟　宇野　重昭
成蹊大学教授
国際基督教大学大学院教育哲学研究室
武蔵大学教授　兵頭　高夫
東京大学教育社会学研究室
成城大学教授＊　鈴木日出男
東京外国語大学講師　高橋　正明
中央大学生活協同組合＊

日本大学教育学研究会　谷敷　正光
駒沢大学助教授　杉浦　智紹
駒沢大学教授
法政大学看中会
立教大学民衆史研究会
駒沢大学教授　鈴木　幸毅
早稲田大学助教授　日下　力
東京外国語大学教授　竹内与之助
法政大学教授　嶺　学
青山学院大学助教授　寺東　寛治
駒沢大学助教授　浅野　克己
立正大学教授　厚東　偉介
立正大学教授　中村　孝之
中央大学教授　三橋　文明
法政大学教授＊　五味　健吉
法政大学講師　窪田　憲子
明治学院大学教授　三和　治
東京経済大学教授　荒川　幾男
東洋大学教授　涌田　宏昭
青山学院大学教授　深沢　実
早稲田大学講師　深沢　実
中央大学講師　沖野　安春

予告

第125回大学共同セミナー
主題　第三世界の文化状況――人間の解放とアイデンティティの模索――
期日　昭和58年12月16～18日
＜全体講義＞
東京大学教授　板垣雄三氏
＜ゲスト講演＞作家　李恢成氏
＜パネルディスカッション＞
一橋大学教授海老坂武氏／イスラム研究家加納吾朗氏／日本A・A作家会議事務局長栗原幸夫氏
＜セクション演習＞
Aアジアと日本の近代化（加藤祐三氏）／B ASEANと日本（クントン・インタラタイ氏・深海博明氏）／Cアフリカは遠いか（楠原彰氏）／Dロ米・カリブ海の歴史を見直す（加茂雄三氏）／Eユダヤ人と中東問題（広河ルティ氏・板垣雄三氏）／F第三世界の文化と人間解放（針生一郎氏）■＜ウード演奏＞ハムザ・アッディーン氏

▼第126回大学共同セミナー
主題　人間性の回復を求めて
―現代における救いの問題―
期日　昭和59年1月14日、15日
＜ゲスト講演＞
二松学舎大学教授　佐古純一郎氏
＜セクション演習＞
A現代における人間性の回復―ブーバーの我－汝の関係の思想を中心として（谷口龍男氏）／B罪と救い―エレミヤと現代（小泉仰氏）／C解脱と救済―仏教と現代（峰島旭雄氏）／D救いを阻害するもの―タナトロギー（死学）をめぐって（藤井正雄氏）

上智大学教授　平井　久
東京経済大学教授　木村　立夫
学習院大学教授　門脇　卓爾
明星大学講師　高橋　史朗
東京都立大学教授　坂元　忠芳
埼玉大学講師　渋谷　治美
早稲田大学講師　北野　弘久
立教大学文学部集中合同講義A
東京女子大学教授　鎌田とし子
立教大学教授　村瀬　孝雄
津田塾大学学内ITC
立教大学教授　茂木　虎雄
明星大学教授　木村　久男
成城大学江戸千家茶道文化研究会
明治大学講師　森山　俊雄
立正大学教授　村瀬　興雄
慶応義塾大学深海研究会
立教大学教授　武澤　信一
明治学院大学助教授　岡田　信弘
東京学芸大学ESS
一橋大学商品学研究会
明治大学助教授　福宮　賢一
工学院大学教授　平岡　正徳
慶応義塾大学山田研究会
明治大学講師　竹下　譲
明治大学教授　野田　稔
東京理科大学教授　沖塩荘一郎
成城大学会計学研究会
東京都立大学助教授　鳴澤　實
早稲田大学教授　浅井　邦二
青山学院大学体育会航空部
明治大学講師　林　義勝
東京工業大学教授　黒澤　一清
東京理科大学教授　狩野　紀昭
東京大学教授　坂本　義和
東京都立大学助教授　小寺　彰
東京大学教授　佐々木　毅
東京女子大学生協設立準備会
上智大学教授　佐野　泰彦
工学院大学教授　柿沼　敏雄
大妻女子大学助教授　大場　幸夫
東海大学短期大学部情報処理工学コース
玉川大学教授　田中　宏
都留文科大学教授　和田　明子
国際商科大学教授　松本　雅男
山梨英和短期大学英文学科英文学セミナー
玉川大学助教授　甲斐　隆
大月短期大学助教授　村越　洋子
文教大学女子短期大学 English Seminar
独協大学教授　中島　文夫
東京造形大学運営会・教育研究委員会合同会議
上尾中央看護専門学校
関東近世史研究会
地理思想研究会

■再び八・六の鐘を打つ■

文学教育研究者集団　**沢井充子**

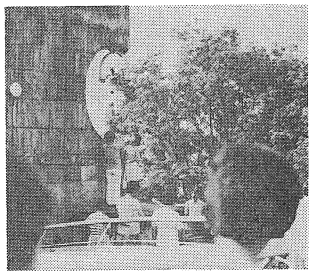
8月6日の広島をはなれるわけにはいかない――これが、被爆者である私の信条でした。が、「文教研の全国集会では8月6日8時15分に黙祈し、『原爆許すまじ』を歌うのです」と聞き、初参加したのが、七年前です。あの日も鐘をつかせていただきました。

その後、広島の新しい仲間を迎えるたびに、鐘つきの役をひきついでもらいました。

ことし、久しぶりに鐘をつかせていただくにあたり、教師館屋上にお集りの方に、思いつくままに次のようなことを話させていただきました。

「私は被爆者健康手帳を持つ被爆者ですが、みなさまは、手帳をお持ちにならない被爆者ではないでしょうか。今や、地球上の生きとし生けるものは、みな、核保有国の核実験による死の灰をあびせられています。けさは、広島を代表して、同じ小学校の仲間と鐘をつかせていただきます。長崎からご参加の方々をも前にして、想いを新たにしております」と。

健康に留意し、これからもセミナー・ハウスでの合宿研究会に参加しつづけたいと思います。



平和を祈って――原爆記念日に
（教師館屋上）

朝日カルチャーセンター
牛込独立キリスト教会
青生塾グループ
カンバーランド長老キリスト教会
東京保育問題研究会
日本ナチュラリスト協会
日本基督教会東京告白教会
日本OR学会
小西六写真工業＊＊
日本電気＊＊
京王百貨店＊
日本フードサービスチェーン協会
東芝プロセスソフトウェア
アイワールド
松下電器産業
住友スリーエム
構造計画研究所
〔個人利用〕
お茶の水女子大学講師栗原　尚子
東京学芸大学教授　杉山　吉茂
中日新聞　相馬　正

●編集後記

本号は夏から秋にかけての活動を収め、合併号とした。事業部だよりに大きく紙面を割いたが、中でも日本人による英語と、外国人による日本語の、ハウス印象記は一興であろう。

夏の大学院共同セミナーの講義をもとにして、巻頭文には川田殖先生が学問論の原点を示して下さっている。セミナーの中で現出した〝対話法〟によって共有した体験を、参加学生のレポートは伝えている。

永野賢東京学芸大教授による「わたしたちの合宿」は、世俗化への大いなる警鐘として読みとりたい。ハウスの本領が試されている。（能）